



視点

## 「結成60周年を迎えて」

池田 智昌 日本製鋼所室蘭労働組合組合長

私ども、日本製鋼所室蘭労働組合は、昭和21年2月12日、戦後の混乱と製品の転換にともなう工場存続という不安の中、労働組合の名の下に2,161人が団結し、そして約1,000人が参集して結成大会が開催され、室蘭労組の歩みがスタートを切りました。

そして60年。一口に60年といいますが、その道のりは実に長く、そして険しいものであったことは、言うまでもありません。

よく歴史の価値は「その長さにあるのではなく、どれだけ多くの有意義な出来事が記されているかにある」のだと言われていますが、まさに室蘭労組の歴史は価値あるものだと自負することができます。そして厳しい時代をその時々々の労使のリーダーが先頭に立ち、汗と涙でつづられたこれまでの一步一步であり、あらためて多くの先輩諸氏に敬意を表したいと思います。

ここで少しく、60年の歩みをひもといて見ると

- \* 結成直後には、食糧難から農機具の修理をし、その見返りに食料を確保していた移動修理班＝別名「食料もらい隊」
  - \* 工場のエネルギーである石炭不足から、生産がストップするので炭鉱に出向き、採炭しその見返りに石炭が工場におくられた炭鉱協力隊＝別名「石炭もらい隊」
- など、まさに、賠償指定工場から製作所の存続をさせるため、文字どおりその活動は労使が一丸となった運動でありました。
- \* 昭和29年の人員合理化に端を発した日本の

三大労働争議に数えられる「日鋼室蘭争議」

- \* その中で組合の分裂と、今日に語りつがれる骨肉の争いをした、新旧労組の統一
- \* 40年代は高度成長とともに活況を増していたものの、50年代には産業構造改革の中で、縮小均衡や分社、分業による苦闘
- \* その中で労働組合が、そして会社が生き残るために会社や条件の異なる仲間がひとつにまとまる、グループ複合体単一労働組合のスタート
- \* それでもなかなか、長いトンネルを抜けきれず、職場と雇用を守る苦渋の選択として、自らの骨身を削る賃金カットの逆提案
- \* 21世紀に入ってから、連続しての赤字解消にはいたらず、構造改革と業態再編などを行い、現在は日本製鋼所を中心に14の組合員を要する関連会社、そして医療法人カレスアライアンスも含め、複合体室蘭労組が形成されております

このようにわれわれの組合は、他の組合とは多少異なる歩みを見ることができますが、それは製作所の再生と、組合員の雇用と生活を守るための苦悩の闘いであったと言えます。

われわれは、ここでその歩みをとめることなく、しっかりと次につなげる活動として「労使の品質をより高度化」し「グループ共同」の実を少しでも上げるための創意と努力を継続し、当面は来年11月に迎える日本製鋼所創立100周年を、安定した中で日本製鋼所にかかわるすべての人たちと喜び合うための歩みを続けて行きます。